

<p>〈I〉「前件肯定」パターン                  (問い) 「①は②であると言えるのはなぜか」                  (答え) 「①は③であり、③ならば②だから」</p>	<p>(例)                  「ソクラテスは死ぬと言えるのはなぜか」                  「ソクラテスは人間であり、人間ならば死ぬから」</p>
<p>〈II〉「後件否定」パターン                  (問い) 「①は②でないと言えるのはなぜか」                  (答え) 「②ならば③だが、①は③ではないから」</p>	<p>「この鳥はカラスでないと言えるのはなぜか」                  「カラスは黒いが、この鳥は黒くないから」</p>

①～③は手順を意味する数字にすぎない。／〈I〉の答えは、「③ならば②であり、①は③だから」の順序でもよい。  
 ／〈I〉の「③ならば②」は、これまで「③は②」としてきたが（それでも通じるが）、〈II〉とあわせるために修正。

三段論法の基本パターン

	大前提	小前提	結論
前件肯定 真なり	AならばBである。	(これは) Aである。	ゆえにBである。
前件否定 真ならず	AならばBである。	(これは) Aでない。	ゆえにBでない。
後件肯定 真ならず	AならばBである。	(これは) Bである。	ゆえにAである。
後件否定 真なり	AならばBである。	(これは) Bでない。	ゆえにAでない。

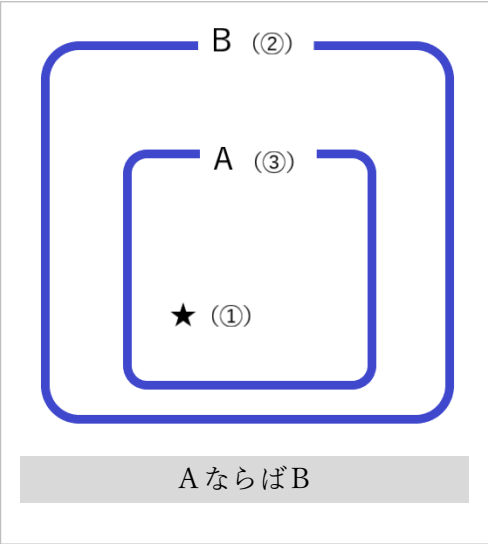
この四つのうち、二つの前提さえ正しければ結論が必ず正しくなる（真になる）のは、「前件肯定」と「後件否定」だけである。

結論が正しいのであれば、「なぜですか」などと前提（理由・根拠）を問う設問（逆にたどらせる設問）も出しやすくなる。読解問題において「なぜですか」と問われるのは、多くの場合、前件肯定・後件否定の形で説明しうるケースである（言語は数学ではないので絶対とは言えないが）。

〈I〉前件肯定パターン

AならばBである。(これは) Aである。ゆえにBである。

右図は、「AならばB」という「大前提」を示している。  
 ★は、目の前の「これ」すなわち具体的な主題を意味する（先の例では「ソクラテス」）。図を見ながら確認してほしい。  
 「AならばB」という大前提のもと、もう一つの前提（小前提）として★がAである（Aに含まれる）ならば、当然の結論として、★はBでもある（Bにも含まれる）ことになる。いたって単純だ。具体的な短文読解の形で見てみよう。ただしまず、先述の型を再掲しておく。解き方の手順を示す①～③は図にも入っているから、確認してほしい。



(問い) 「①は②であると言えるのはなぜか」  
 (答え) 「①は③であり、③ならば②だから」

(本文) 今日は雨が降っています。先生は、「遠足は雨が降ったら中止です」とおっしゃっていました。遠足は、今日は中止ですね。

(問い) 「今日は中止です」とあるが、なぜそう言えるのか。説明せよ。

(答え) 今日は雨であり、雨ならば中止だから。

——解き方——

まず傍線部をパーツ分けし、番号を振る。

(問い)「今日は／中止です」と言えるのはなぜか。

「①は /②である」と言えるのはなぜか。

次に、間に入る情報である③を考える。

(答え)「①は /③であり、/③ならば/②だから」

「今日は／雨であり、／雨ならば／中止だから」

## 〈Ⅱ〉後件否定パターン

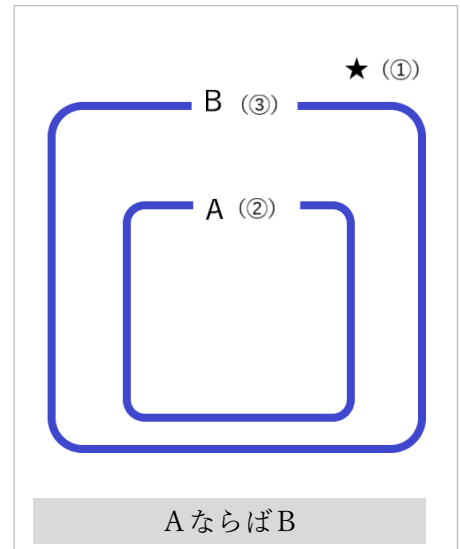
**AならばBである。(これは) Bでない。ゆえにAでない。**

下図は、先ほどと同じく、「AならばB」という「大前提」を示している。★は、目の前の「これ」すなわち具体的な主題を意味する(先の例では「この鳥」)。図を見ながら確認してほしい。

「AならばB」という大前提のもと、もう一つの前提(小前提)として★がBでない(Bに含まれない)ならば、当然の結論として★はAでもない(Aにも含まれない)ことになる。やはり、いたって単純だ。

ここでも、具体的な短文読解の形で見てみよう。ただしまず、先述の型を再掲しておく。

解き方の手順を示す①～③は図にも入っているから、確認してほしい。前件肯定パターンの図ではAが③でBが②だったが、今回は逆になっている。これについては気にしなくてよい。①～③は、あくまでも手順を分かりやすくするための便宜上の数字である。



(問い)「①は②でないと言えるのはなぜか」

(答え)「②ならば③だが、①は③ではないから」

(本文) このお店は、月曜は休みです。今日はお店が開いています。

今日は月曜ではないということですね。

(問い)「今日は月曜ではない」とあるが、なぜそう言えるのか。説明せよ。

(答え) 月曜ならば休みだが、今日は休みではないから。

——解き方——

まず傍線部をパーツ分けし、番号を振る。

(問い)「今日は／月曜ではない」と言えるのはなぜか。

「①は /②でない」と言えるのはなぜか。

次に、追加すべき情報である③を考える。

(答え)「月曜ならば／休みだが、／今日は／休みではないから」

「②ならば /③だが、 /①は /③ではないから」

難しいと思うかもしれないが、慣れれば全く難しくない。原理自体は、小学三、四年生でも分かる。

実際に「なぜですか」と問われたとき、前件肯定と後件否定、どちらのパターンなのかを見分けるのも、さして難しくない。「～ではないと言えるのはなぜか」というように否定形になっていれば、後件否定の型をイメージしてみればよい。そうでないなら、前件肯定の型をイメージする。

ただし、先にも触れたように、言語は数学とは異なる。

全てを型どおりに処理できるかといえば、そうではない。それは、他の鉄則で述べているどの型であれ、同じことである。型どおりにできないと思ったら、意味が通じるように型を破っていくしかない。

しかし、型を破るにも「まず型ありき」である。型を持たないのに型破りをしようとしたらそれは型破りではなく「型なし」である、とは、よく言われることである。  
 ところで、先に「真ならず」とした「前件否定」と「後件肯定」が気になっている人もいるかもしれない。ページも限られているが、少しだけ紹介しておこう。

まず、後件肯定から。

「AならばBである。(これは) Bである。ゆえにAである」

「人間ならば死ぬ。この生き物は死ぬ。だから人間である」

これだけで、いかにおかしな論理かが分かる。犬だって魚だって虫だって死ぬのだから。

要するに、後件肯定にだまされることは少ない。

問題は、前件否定である。

「AならばBである。(これは) Aでない。ゆえにBでない」

「月曜ならば休みだ。今日は月曜ではない。だから休みではない」

これ、つい納得しそうになる。しかし、月曜以外に休みがないとは言い切れない。日曜も休みかもしれない、今日が日曜ならば、休みである。

ということで、気をつけるべきは前件否定である。

理由を問う選択式設問において、そのニセ選択肢の中にこういうのが紛れている可能性があるから、覚えておいて損はない。

ここまで説明したので、もう一つだけ。

右図は、「逆・裏・対偶」という論理関係図である。

これまで述べてきたことと密接に関係している。

「AならばB」の対偶は、「BでないならばAでない」。

すなわち、「AならばB」という大前提と、「Bでない」という小前提が成立するならば、「Aでない」と言えるということであり、これは後件否定の形である。

後件否定は、「対偶」。対偶は必ず真なり。ということである。

ちなみに、残りはこうなる。

前件否定は、「裏」。裏は必ずしも真ならず。

後件肯定は、「逆」。逆は必ずしも真ならず。

